

さけます人工孵化放流に関する古文書の紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野川, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009672

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



さけます情報

さけます人工孵化放流に関する古文書の紹介

の が わ ひ で き

野川 秀樹（北海道区水産研究所）

我が国における本格的なさけます人工孵化放流の開始は、明治 21 年に石狩川支流千歳川上流に豊富な湧水を利用して開設された官営の「千歳鮭鱒人工孵化場」に始まり、平成 30 年には 130 年の節目を迎える。

千歳鮭鱒人工孵化場の開設は、明治 19 年の北海道廳（昭和 22 年に現在の地方自治体としての「北海道」となるまでは、国の直轄の官庁であった）設置のわずか 2 年後のことであり、官営の水産専門機関としては北海道で最も古い組織と言える。明治 34 年には北海道水産試験場（以下、道水試）の設立に伴い、道水試の分場や支場となるが、その後、昭和 2 年に道水試から分離し、いくつかの変遷を経て、昭和 27 年にさけますの資源造成を主要な業務とする「水産庁 北海道さけ・ますふ化場」となる。一方、道水試は、昭和 25 年に国の水産研究体制の見直しにより、「水産庁 北海道区水産研究所」（以下、北水研）と北海道立水産試験場（北水試）に分離することになる。

北海道さけ・ますふ化場は、その後、さけます資源の増大や国の行政改革等により、「さけ・ます資源管理センター」への改組、独立行政法人化を経て、更に平成 23 年には北水研と統合し現在に至っている。この統合した現在の姿は、時期は異なるものの、ともに道水試から分離した組織であることを考えると、元の鞘に納まったと言えなくもないように思える。

このように、千歳鮭鱒人工孵化場を嚆矢（始まり）とする現組織は、その時代の状況や要請により態勢や役割を変遷しつつ、今日まで 130 年近い歴史を刻んできた。その歴史を物語るものとして、当所には古い文書や写真などが多数保存されている。この機会に、それらの中から明治期のものを中心に紹介してみたい。

明治期の文書綴

千歳鮭鱒人工孵化場は、上述したように幾多の組織の変遷を経る（現在は北水研千歳さけます事業所（以下、千歳事業所）となっている）とともに、事務所の移転を伴う大規模な施設整備も数回行われていることから、紛失したり廃棄されたりしたものも多かったと思われる。そのような中、明治期の文書綴が千歳事業所に保存されていた（図 1）。千歳川におけるサケの捕獲状況を上部機関である北海道廳や農商務省水産局へ定期的

に報告した文書などが綴られており、当時のサケのそ上状況などを知ることができる。

また、「明治四拾壹年度 往復綴」には「魚類命名ノ件」という文書（図 2）が綴られており、当時ヒメマスはアイヌ語で「カバチェッポ」と呼ばれていたが、この名称を「姫鱒」と命名することに決定したという内容のものである。明治 41 年 12 月 26 日付けで北海道廳から道水試に発出されている。

各種記録簿

千歳事業所に長年にわたって保存されてきた資料の一つに、明治期における千歳川のサケ及び支笏湖のヒメマスに関する捕獲採卵・孵化放流成績書、魚体測定表、気象観測表などの各種成績簿が

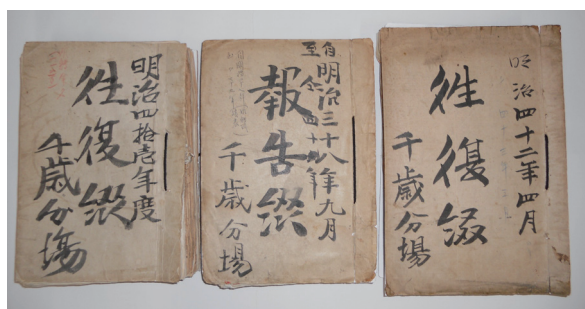


図 1. 明治期の文書綴。

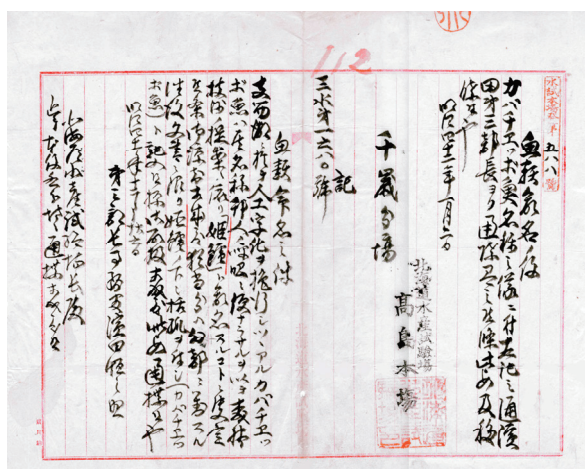


図 2. 「姫鱒」命名に係る文書。命名の理由として「名称邦人呼唱ニ便ナラサルヲ以テ森脇技師ノ提案ニ依リ姫鱒ト命名スルコトニ決定」と書かれている。

ある (図 3)。

これらの成績簿の中から貴重な記録を読み取ることができる。明治期における千歳川でのサケの捕獲期間は、その理由は紙数の関係で省略するが、現在のように 9 月から 12 月までではなく、まさに冬真っ只中の 12 月から翌年 1 月までであったことが分かる。また、孵化成績を見ると、人工孵化放流が開始されてから数年後には 90% を超える高い孵化率が記録されており、卵管理に関しては当初から高い技術を有していたことが伺える。

また、千歳鮭鱒人工孵化場の官設は明治 21 年 11 月であるが、その翌月の 12 月から孵化場での気象観測が開始され、天候、気温、孵化水温、河川水温等が測定されている。更に、記事欄には地震や洪水等の特記事項が記述されており、樽前山が噴火した明治 42 年 4 月 12 日の記事欄には「午前 11 時 45 分樽前山噴火ス音響約 1 分間宛ガラ荷馬車ノ橋上ヲ通過スルガ如シ黒煙立昇リ 0 時 10 分頃山灰飛散セリ三尺四方ノ橋上ニテ 27 個噴石ヲ拾得ス大ハ大福大小ハ栗粒大ナリ」とあり、千歳事業所の構内にまで噴石が飛んでくる大噴火であったことが分かる。

復命書

復命書も多く残されている。明治から大正初期のものから紹介したい。1 点目は酒井宮次郎 (明治 21 年の千歳鮭鱒人工孵化場の開設に当たり、函館近辺の民営の茂辺地川孵化場から経験をかわれて招聘された技術者) の「復命書」(図 4) で、明治 25 年のものである。これには、当時、サケの卵の輸送に欠かすことのできなかった水苔の採集場所や採集方法が記述されている。水苔は卵の輸送の際に保湿等のために用いられたが、必要な量を確保するのは難しく、当時は貴重なものであったようである。

2 点目は大正 6 年に千歳川のサケ密漁状況を調査した復命書 (図 5) である。これからは、密漁の方法や場所だけでなく、当時の河川改修前の川筋の状況やアイヌ語地名などを知ることができる。

次に紹介するのは、ニジマス発眼卵の移植に関する復命書 (図 6) である。ニジマスは明治 10 年に初めて我が国にアメリカから移植された。北海道への初めての移植は大正 6 年のことで、その移植は、当時の帝室林野局中宮祠湖養魚場 (現増養殖研日光庁舎) から道水試千歳支場 (現千歳事業所) へと行われた (農林省水産局 1927)。この復命書には、運搬の方法や行程が詳述されている他、道水試西別支場 (現北水研虹別さけます事業所) にも同時に 3 千粒のニジマス発眼卵が移植されたことが記述されていた。千歳支場に移植されたニジマスはその後継代飼育され養鱒業者等へ発眼卵が分与されることになる。西別支場に移植さ

れたニジマスに関しては、その後の記録は見当たらない。

写真

孵化場やサケの親魚を採捕する捕獲場の写真も数多く残されている。明治期の古い写真については、本誌の巻頭写真でこれまでも何点か紹介されている。ここでは冊子に掲載されている写真の中から人工孵化放流の技術史的な観点から 2 枚の写真を紹介する。

人工孵化放流が開始された当初、採卵は当時欧米で実施されていた方法、成熟した雌の腹を圧迫



図 3. 明治期の各種成績簿。



図 4. 酒井宮次郎の復命書。

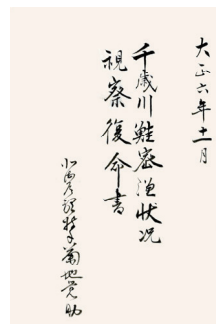


図 5. 千歳川の密漁状況に関する復命書。

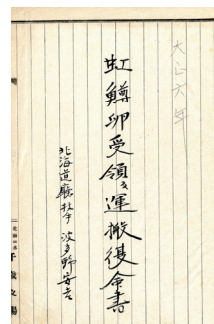


図 6. ニジマス発眼卵の移植に関する復命書。

して卵を絞り出す、いわゆる、搾出法で行われていた。それを示すのが図 7 である。一人が雌の頭を持って、もう一人が腹を絞り出している。これは明治 20 年代の写真とされ(水産庁北海道さけ・ますふ化場 1959), 千歳川上流部(千歳鮭鱒人工孵化場付近)での採卵の様子と思われる。

2 枚目は明治 33 年に紹介された採卵の様子(図 8)である(北海道廳水産課 1900)。一人が座って小刀のようなもので雌の腹を切り開いている。いわゆる、切開法で卵を取り出している。明治 30 年に千歳川での比較試験により、切開法が採卵作業の迅速化、受精率の向上等に関して搾出法より優れていることが確かめられたことで(北海道廳水産課 1900), 切開法が導入されることとなり、現在でもこの方法により採卵が行われている。写真は先程の千歳川上流部から 10 km 程下流の西越と呼ばれる捕獲場での採卵風景であり、切開法の開発は、この捕獲場の下流部への移転が深く関わっている。移転により孵化場までの卵の運搬時間が大幅に増え、それに伴って増加した卵への影響や人への負担を軽減するため、迅速な採卵技術の開発が必要となったのである(北海道鮭鱒保護協会 1938)。

図書

明治期の貴重な図書としては、明治 24 年に新潟県の河川における魚類の減耗要因や減耗防止策等を記録した「北越河漁調査報告」(松原新之助 1892)、我が国における人工孵化放流事業の沿革や事業内容等を綴った「北海道鮭鱒人工孵化事業報告」(北海道廳 1894)、「千歳鮭鱒人工孵化事業報告」(北海道廳 1900)、「日本鮭鱒養殖誌」(松原新之助 1912)、そして、当時の孵化放流の実施マニュアルとも言える「鮭鱒人工養殖法」(森房次郎 1897)などが所蔵されている。この他にも道水試の明治期の試験報告など、いずれも貴重な図書である。

おわりに

平成 26 年 8 月に北海道立文書館が所蔵している「開拓使」(明治 2 年～15 年に北海道に置かれた)が残した文書類が、国の重要文化財に指定されたこと(北海道立文書館 2014a)、明治 42 年の北海道廳舎の火災で明治 19 年から明治 40 年頃の文書類のほとんどが焼失していること(北海道立文書館 2014b)を考えると、当所に残されている明治期のさけます人工孵化放流に関する文書類は、その歴史を後世に伝えるものとして貴重なものであり、将来にわたって保存していくことが重要と



図 7. 明治 20 年代の採卵状況。



図 8. 明治 33 年頃の採卵状況。

考えられる。また、現在の孵化放流技術の多くは明治期に取り組みされた様々な試行錯誤を土台として構築されてきたものであり、技術史的な観点からも貴重な資料である。

これらの資料が広く利用され、さけます類の適切な資源管理や孵化放流技術の高度化等に役立つことを期待しているところである。

引用文献

- 水産庁北海道さけ・ますふ化場. 1959. HATCHERY. 水産庁北海道さけ・ますふ化場, 札幌. 34 pp.
- 北海道鮭鱒保護協会. 1938. 鮭鱒彙報, 第 10 年第 38 号, 115 pp.
- 北海道廳水産課. 1900. 千歳鮭鱒人工孵化場事業報告. 北海道廳水産課, 札幌. 83 pp.
- 北海道立文書館. 2014a. 赤レンガ 北海道立文書館報, 第 49 号, 4 pp.
- 北海道立文書館. 2014b. 開拓使文書のさがし方. 文書館利用講座資料, 8 pp.
- 農林省水産局. 1927. 外国産優良水族移植成績. 水産増殖調査書(特別). 農林省水産局, 東京. pp. 327-352.